

シンポジウム総合コメント 1

千 田 稔

今回の大会シンポジウム「宗教文化の歴史地理学」は、歴史地理学研究に積極的に宗教を前面にだした点において、私はある種の感慨をいだいた。私が大学院の学生だった頃、水津一郎先生が、われわれに宗教地理学に関心をもつことを示唆され、ほどなく徳久球雄氏らの共訳によるD.E.ソーファの『宗教地理学』（大明堂、1971年）が刊行されたことを思い出すからである。それより以前から宗教が地理学の対象になっていたのではあるが、宗教が地域や空間の形成に根底的な意味をもつということについては、ほとんど問われることはなかったのではないだろうか。当時の水津先生の研究の一つの対象として、ヨーロッパにおけるキリスト教の教区の形成と実質的な地域との関係があったことが、上のような示唆としてわれわれに語られたのであろうと記憶する。

今回の各報告は、いずれも精緻な実証的手法によるもので、「宗教文化」をとりあげた歴史地理学研究としては、水準の高いものであったし、かつ今後の歴史地理学研究の方向性という観点からみれば、大きな成果を期待できるものである。

今後の歴史地理学研究の方向性について、私は二つのことを考えている。その一つは、先に触れたように、宗教が地域や空間の形成原理となるならば、それを探り出す作業は避けてはならないし、同時に宗教の改変過程によって地域や空間が変容する状況も追跡しなければならぬであろう。もう一つは、地理学、とりわけ歴史地理学において宗教が意味

をもつのは、対象地域・空間への思想的アプローチという点である。いうまでもなく、地域や空間が宗教とは無関係に形成される場合は少なくないが、しかし歴史時代の地域・空間の形成に宗教が、実質的にせよ、象徴的にせよ関わっているならば、その思想性に触れないでは、その研究は実体から遊離したものであるとしてしか存在しない。ここに指摘した二点は、わずかな例外を除いて、正直なところ、われわれの歴史地理学には十分意識されないまま、今日に至ったといつてよいであろう。しかし、今回の報告では、講集団や信仰圏などは、地域と空間の形成や構成への視線を投げかけていると読みとれるし、風水研究や墓地の研究も、生と死の空間論として、また門前町の研究も、聖と俗の境界的空間という点において十分に思想性を内包するものであった。

今回のシンポジウムに触発されて、私のここ数年の反省的課題として脳裏を去ることがなかった上記の二つの問題を織りませながら、まずは、私の身近な研究対象を事例的にとりあげることをお許しいただきたい。

平城京の問題である。平城遷都に際して、元明天皇が藤原宮でだした詔は、平城の地は、三山が鎮をなし、四神（四禽）が整然として配された、よい土地であるというものであった。三山が鎮をなすというのは、藤原宮が、いわゆる大和三山を配して立地したことの意味を平城京にも継承することができることを指すものである。三山とは、天武天皇が傾倒した道教において、不老不死の仙人の居

所であった三神山（蓬莱・瀛州・方丈）のことであると、万葉歌から推定でき、大和三山をそれに見立てたと考えられる。司馬遷の『史記』に、中国の東海に浮かぶと記されているが、架空の島である。一方、四神が配されているというのは、東一青龍一河川、南一朱雀一池沼、西一白虎一大道、北一玄武一丘陵という五行思想と地形の関係をいう。つまり、平城京（おそらく平安京も）は、神仙思想と五行思想とを組み合わせて宮都の思想性を表現したと考えられる。そこで、この場合にとりあげられた神仙思想は、宮都の永遠性を表現するのであったとみられるが、四神は、本質的に中国の宗教哲学に関係する星宿観、つまり天空世界に属するものである。このことは、日本古代の宮都を解釈する場合に、無視し難い意味をもつ。つまり日本古代の宮都は、天空世界を象っているのである。宮都がすなわち天空であるのだ。平城京は、通説的に唐の長安城を模したといわれてきたし、その復原された平面プランにおいて、それは認めてよいであろう。しかし、中国の都城については、天空を模して地上につくられたといわれ、都城は天空のコピーであると認識された。ここに、日本古代の宮都が「天」であることと、範を求めた中国の都城が「天のコピー」という、表面的にみれば逆転現象が東アジア世界で起きていたということになる。そのことと相関するのは、天皇と皇帝という称号である。天皇は、中国の道教の最高神天皇大帝に由来する説にしたがえば、天空の帝王（一般には北極星をあてる）である。唐代にも天皇を名のった事例が一つだけあるが、歴史時代を通して最高位の称号は皇帝であり、天子とされる。天子とは、天帝が命じた地上の支配者であり、皇帝の居所は、あくまでも地上であり、天空ではない。日本でも天子という言葉は、『隋書』倭国伝にみられ、平安朝以降にも用いられるが、飛鳥～奈良時代には原則的に使用されなかった。上に

記したことで察していただけたと思うが、平城京をいくら克明に復原し、唐の長安城と形が類似していることを指摘しても、その思想性は異なるのだということは、歴史地理学から発信すべきことであるのだ。

あまりにも私の研究に近い事例で説明することになってしまったが、歴史地理学の研究が宗教を通して、地域や空間の思想性を導くとすれば、このようなことも考えることができるであろうという一つの提案にすぎない。だが、このような些細なことからも、連鎖的に問題とすべき課題がみつかる。

日本古代の都が天であるという認識は、万葉歌の、鄙にかかると枕詞「天離る」の意味をも解きあかす。つまり鄙は宮都＝天から離れた地域ということになる（拙稿「日本における『ヤナカ（田舎）』の成立」、歴史地理学41-1, 1999年）。厳密には天は畿内を指すのだが、さらに古代の行政区画である「五畿七道」として、八つの地域に区分された理由もおぼろげながら見えてくる。それは、おそらく、道教における世界観は八方位からなるとされていることと関連するのではないだろうか。あるいは、官衙域について「方八丁」という地名が遺存するのも同様な思想的淵源があるのかもしれないが、少なくとも、「八」という字形から末広がりでという吉祥的な意味をくみ取る通説には疑問を感じる。また、「五畿内」として、最終的に五カ国でもって畿内とするのも、宮都をおく国とその周辺の四カ国で構成された原理は五行思想によるものという理解の余地があると私は考えている。それでは、条里制の里が36坪からなるのは何故かと問われたら、もしかしたら宗教的な原理が潜んでいるようでもあるが、断案をもたないので、これ以上憶測を重ねることは、不謹慎の誹りをうけるであろう。

宗教が地域や空間の形成に意味を与えてきた事例について、さらに二、三の事例をあげて、今後の研究の進展を期待したい。

中世において強く意識される「国土は神国である」という観念の構成単位は、各地の霊地・霊峰である。仏教の浄土思想における「あの世」の延長線上として「この世」も浄土であらねばならず、それを保証するためには、現世の国土を神国とみなす必要があった（『黒田俊雄著作集』第4巻、法蔵館、1995年）。霊場・霊峰研究は歴史地理学においても研究の蓄積は少なくないが、上にみたような、国土＝神国という体系的視点などと結びつけば、個々の研究がローカル性を脱皮できる手がかりとなると思われる。

明治時代の北海道の殖民と開拓に結びつくのは、北海道神宮（札幌神社）の祭神である。創祀にあたって、祭神は、大国魂神、大那牟遲神、少彦名神の三柱の神がまつられたが、これらは開拓三神とよばれる。記紀神話で語られる神をまつることは、北海道の内地化を意図的に実施するためであって、この神社を象徴的にとらえることによって、北海道殖民の過程の宗教的思想性を見いだすことができよう。同様の神道政策が海外の植民地でなされた事実を知れば、北海道の明治における位置づけは納得できるであろう。台湾でも明治34年に台湾神社が竣工されるが、その祭神は開拓三神であった。終戦の約一年前にアマテラスが祭神とされるのは、本土化をめざす最後の施策であったと考えられる。終戦後に占領軍によって使われたことばではあるが、「国家神道」にともなう海外神社は、近代日本の領土拡張のための象徴的なランドマークであった。戦後、かつての植民地から、それぞれの地域の事情による差はあるが、海外神社は姿を消した。それは当然のようではあるが、アジアの植民地でもキリスト教の教会は、今日に至るまで信仰の景観的シンボルとして継続しているものは少なくない。この違いについて、いまさら指摘するまでもなく、それぞれの宗教が普遍性をもっているかどうか、とともに布教の歴史と信仰の

自発性などによる。この点に関して、戦後折口信夫は、「神道の新しい方向」や「民族教から人類教へ」（いずれも『折口信夫全集』20、中央公論社、1996年、所収）と神道の普遍的宗教化を訴えたが、それに耳を傾ける人は少なかった。

明治に出された神社合祀令による神社の統廃合の問題も、歴史地理学の視点から考察すべき対象としてある。原則的に一町村に一つの神社と規定することによって、行政区画と神社の整合性が画され、国家組織に組み込まれ、伝統的な神社の信仰空間が崩れていった。

また、日本における特異な現象である神仏習合についても、歴史地理学のテーマとなりうる。例えば、伝統的な村落にみる寺と神社の共存する「違和感のない景観」は、なぜ生まれたのだろうか。それについては、さまざまな答えが用意されると思うが、神仏習合論という日本文化から解きあかそうとするアプローチとともに、一般論として村落空間における生（神社）と死（寺）というシンボリズムの使い分けから論じることもできよう。このような村落空間が、戦後の都市化の中で形成される新興住宅地に継承されることは、ほとんどなくなってしまった。そのような現象を「宗教なき集落空間」とでも呼んでおくとして、宗教が地域や空間の生成に関わらない時代をわれわれは生きていることになる。かつて集落景観の生成に関与した宗教的要素が、現代では資本に変わった。そして、あえていうならば、資本の宗教化という転換によって新しい集落は造成されていくことになった。その申し子のごとく登場してきたのが、結婚式場、葬儀会館、霊園の類である。これらの立地と分布も「宗教文化」の地理学のテーマとなろう。それは、宗教文化の経済的営為ともいえる。かつての寺社と荘園、巡礼の観光事業化、結婚式のためのチャペルのあるホテルなどをあげることができる。

だが、日本の宗教に関する現実、上にみたような皮相的なものだけではなく、若年層の心より深層に潜みつつある。時にそれはマスコミなどによって「事件」として垣間見せる場合もあるのだが、実体をわれわれの地理学は、景観という形で確認できないもどか

しさの中にある。将来の歴史地理学が、この不安な時代の宗教文化を、景観論あるいは地域構造論を通して論じることができるのであろうか。

(国際日本文化研究センター)